

令和5年度(2023年度) 研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)

中学校道徳科における各教科等や内容項目を 相互に関連付けた計画的・発展的な授業構想

—道徳教育全体計画や年間指導計画を基にした学習計画と学習履歴の組織的な活用を通して—

内容の要約

本研究では、道徳科において各教科等や内容項目を相互に関連付けた計画的・発展的な授業を構想することで、生徒自らが道徳性に係る成長を実感できるようにすることを目指した。そのために、道徳教育全体計画や年間指導計画を基に道徳科における「単元」を設定して、各教科等や内容項目を関連付けて授業を構想した。また、生徒が蓄積した学習履歴「M-ログpluS」や振り返りの記述を指導者間で組織的に共有・分析することで指導と評価の一体的な充実につなげた。さらに、生徒が学習履歴「M-ログpluS」を活用して「単元」の学びを振り返ることで、道徳性に係る成長を実感することができた。

キーワード

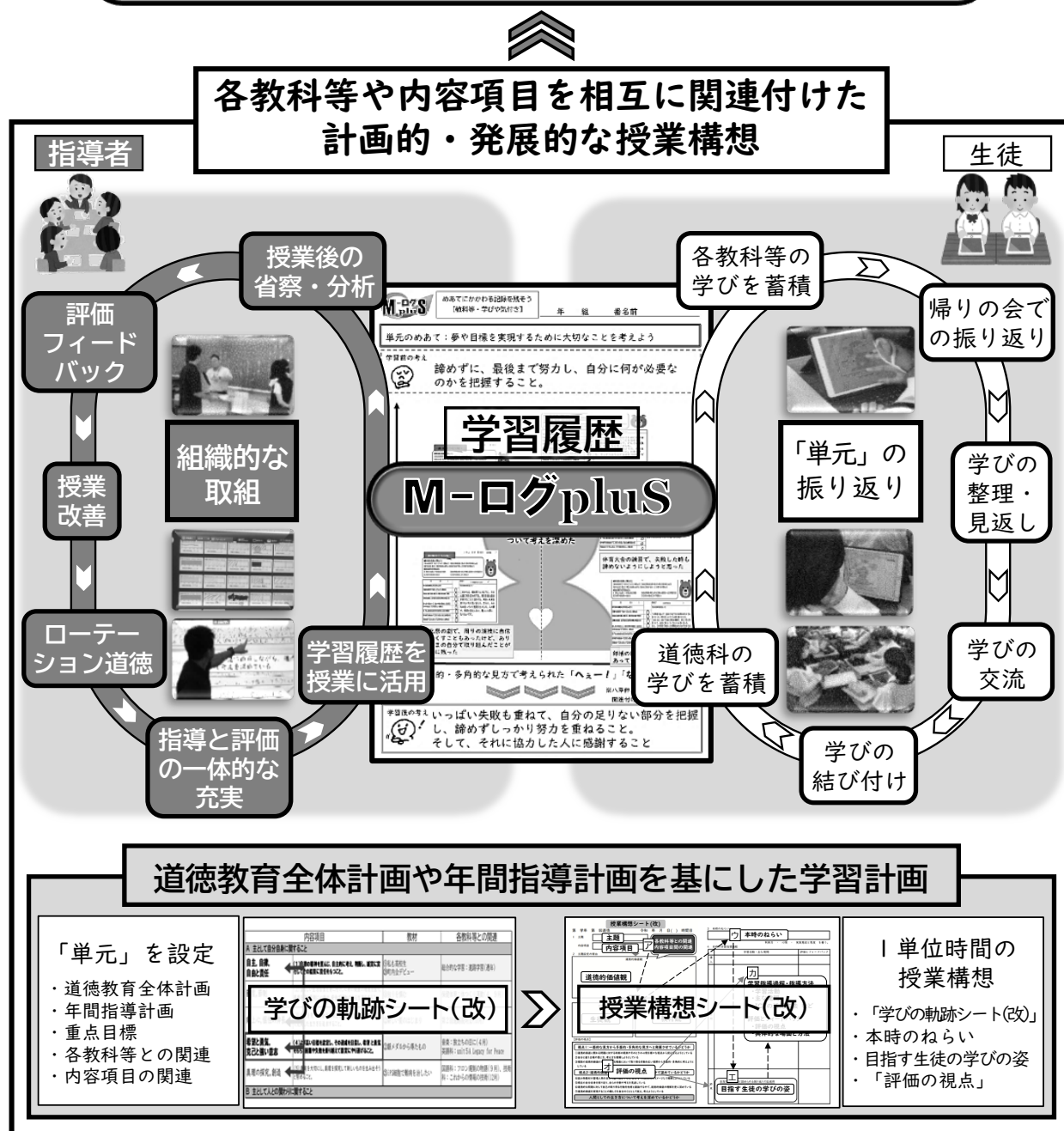
道徳性に係る成長を実感
学習履歴「M-ログpluS」

各教科等や内容項目の関連付け
指導と評価の一体的な充実

「単元」
組織的に共有・分析

目次	
I 主題設定の理由	(1)
II 研究の目標	(2)
III 研究の仮説	(2)
IV 研究についての基本的な考え方	(2)
1 道徳教育全体計画や年間指導計画を基にした学習計画	(2)
2 学習履歴「M-ログpluS」の活用と組織的な取組	(3)
3 研究成果の検証	(4)
V 研究の進め方	(4)
1 研究の方法	(4)
2 研究の経過	(5)
VI 研究の内容とその成果	(5)
1 研究協力校における現状の把握と道徳科における「単元」の設定	(5)
2 各教科等や内容項目を相互に関連付けた授業の実際	(6)
3 組織的な取組による指導と評価の一体的な充実	(8)
4 学習履歴「M-ログpluS」を活用した実践	(10)
5 生徒と指導者の変容	(12)
VII 研究のまとめと今後の課題	(13)
1 研究のまとめ	(13)
2 今後の課題	(14)
文 献	

生徒が自らの道徳性に係る成長を実感できる姿



課題 ・年間指導計画や教材配置等の見直し

・道徳科での学びと各教科等での学びを結び付ける

令和4年度研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)

Q「各教科等や体験活動において、道徳科の内容項目との関連を意識して指導を行った」

A 中学校56.2%(小学校比-16.7)

令和4年3月「道徳教育実施状況調査」

Q「生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器について、生徒のスタディ・ログを活用した学習状況等の確認にどの程度活用していますか」→「ほぼ毎日」「週3回以上」「週1回以上」の回答

A 滋賀県22.2% 令和4年4月「全国学力・学習状況調査[学校質問紙]」

道徳科が学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要としての役割を果たすことができるよう、計画的、発展的な指導を行うことが重要である。

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編

研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)

中学校道徳科における各教科等や内容項目を相互に関連付けた計画的・発展的な授業構想

—道徳教育全体計画や年間指導計画を基にした学習計画と学習履歴の組織的な活用を通して—

I 主 題 設 定 の 理 由

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編(以下、学習指導要領解説という。)では、「道徳科が学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要としての役割を果たすことができるよう、計画的、発展的な指導を行うことが重要である。特に、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育としては取り扱う機会が十分でない道徳的価値に関わる指導を補うことや、生徒や学校の実態等を踏まえて指導をより一層深めること、相互の関連を捉え直したり発展させたりすることに留意して指導することが求められる」¹⁾と示されている。このように、生徒が自らの学びを振り返り、成長を実感しながら、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために、道徳科において各教科等や内容項目を相互に関連付けて、計画的・発展的な授業を行うことが求められている。

このことについて、令和3年度道徳教育実施状況調査¹⁾の結果では、「『道徳教育』の充実のために学校としてどのような取組を行いましたか」という設問に対して、「各教科等や体験活動において、道徳科の内容項目との関連を意識して指導を行った」を選択した中学校は、56.2%(小学校比-16.7)であり、課題が見られた。

また、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)」(令和3年1月)で、「学習履歴(スタディ・ログ)をはじめとした様々な教育データを蓄積・分析・利活用することにより、児童生徒自身の振り返りにつながる学習成果の可視化がなされるほか、教師に対しては個々の児童生徒の学習状況が情報集約されて提供され、これらのデータをもとにしたきめ細かい指導や学習評価が可能となる」²⁾とある。道徳科において、生徒が自らの学びや気付きの記述を学習履歴として蓄積することは、生徒自身が学習を振り返り、自己の変容に気付き、道徳性に係る成長を実感することに効果的であると考えられる。しかし、令和4年に実施された全国学力・学習状況調査の本県の回答集計結果[学校質問紙]において、「生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器について、生徒のスタディ・ログを活用した学習状況等の確認にどの程度活用していますか」という設問に対して、「ほぼ毎日」「週3回以上」「週1回以上」と回答した中学校の割合は22.2%であった。

当センターでは、令和4年度研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)(以下、令和4年度研究という。)において、1人1台端末を活用し、生徒が蓄積した学習履歴を同学年を担当する指導者で組織的に共有・分析した。その結果、指導者の道徳科の授業における指導と評価に対する理解が深まった。また、生徒自身が学習履歴の整理・見直しをしたことで、道徳性に係る成長を実感する生徒の姿につながった。しかし、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の視点から、生徒自らが成長をより実感できるように、道徳科の年間指導計画や扱う教材の配置等の見直しを進めることや、道徳科での学びと各教科や学校生活を結び付けることについては課題が残った。

そこで、本研究では、道徳教育全体計画や年間指導計画を基に、各教科等や内容項目を相互に関連付

¹⁾ 道徳教育実施状況調査は、「道徳科を要とした道徳教育の全国的な取組状況や課題を把握することで、今後の道徳教育のさらなる改善、充実を図るために必要な知見を得ること」を目的に、令和3年度に無作為抽出による小学校1,197校、中学校1,144校と、全ての都道府県、市区町村の教育委員会を対象に実施された調査である。本調査は、文部科学省による「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」の一環として、株式会社パデコが行ったものである。

けた道徳科の学習計画を立てる。そして、生徒が1人1台端末に蓄積した学習履歴を指導者が組織的に活用する。そうすることで、各教科等や内容項目を相互に関連付けた計画的・発展的な授業構想につながり、生徒が自らの道徳性に係る成長を実感できると考え、本主題として設定した。

Ⅱ 研究の目標

道徳教育全体計画や年間指導計画を基に道徳科の学習計画を立て、指導者が学習履歴を効果的に活用することにより、各教科等や内容項目を相互に関連付けた計画的・発展的な授業構想を行い、生徒が自らの道徳性に係る成長を実感できるようにすることを目指す。

Ⅲ 研究の仮説

道徳教育全体計画や年間指導計画を基に、「学びの軌跡シート(改)」を活用して道徳科の学習計画を立てる。そして、生徒が1人1台端末に蓄積した道徳科や各教科等の学習履歴を、同学年を担当する指導者間で共有し、活用方法について共通理解を図り、組織的な取組を行うことで、指導と評価の一体的な充実につなげる。そうすることで各教科等や内容項目を相互に関連付けた計画的・発展的な授業を構想することができ、生徒は各教科等の学びを結び付けて、自らの道徳性に係る成長を実感できるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 道徳教育全体計画や年間指導計画を基にした学習計画

(1) 「学びの軌跡シート(改)」による道徳教育全体計画の具体化

学習指導要領解説では、「道徳教育の全体計画に基づき、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動との関連を考慮しながら、道徳科の年間指導計画を作成するものとする」「3学年間を見通した重点的な指導や内容項目間の関連を密にした指導、一つの内容項目を複数の時間で扱う指導を取り入れるなどの工夫を行うものとする」¹⁾と示されている。そこで本研究では、「学びの軌跡シート(改)」(図1)を用いて学習計画を立てる。これは、当

内容項目	教材	各教科等との関連
(1) 自主、自律、自由と責任 (2) 節度、節制 (3) 向上心、個性の発揮 (4) 希望と勇気、克己と強い意志 (5) 真理の探究、創造 ※ 主として人との関わりから学ぶこと (6) 思いやり、感謝 (7) 礼儀 (8) 友情、信頼	学年の重点目標を太字で示す 学校の重点目標を赤で囲う 内容項目の関連を示す(「単元」を設定)	ア 関連する各教科等を示す

図1 「学びの軌跡シート(改)」の一部(内容は一例)

センターの令和3年度研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)(以下、令和3年度研究という。)の研究成果物である「学びの軌跡シート」に、各教科等との関連を示す部分(図1の「ア」)を付け加えたシートである。このシートでは、道徳教育全体計画や年間指導計画を基に学校、学年の重点目標に関わる内容項目を赤で囲い、太字で表すとともに(図1の「イ」)、それぞれの内容項目と関連付ける各教科等を示す。そして、道徳教育全体計画の学年の重点目標と関わりの強い複数の内容項目を、一つのまとまりにした学習計画(以下、「単元」という。)を設定する。「単元」を構成する内容項目については、それぞれを矢印でつなぎ、関連性を把握できるようにする(図1の「ウ」)。また、道徳教育全体計画の学年の重点目標から「単元」のめあてを設定することで、「単元」を通して生徒が考えを深めていく内容を明らかにする。「単元」の1単位時間の授業では、各教科等や内容項目を関連付けながら「単元」のめあてについて考えを深められるような授業を構想する。

このように、「学びの軌跡シート(改)」を活用することで、道徳教育全体計画や年間指導計画を基に学習計画を立て、各教科等や内容項目を相互に関連付けた授業を構想することができる。

(2) 「授業構想シート(改)」による1単位時間の授業構想

1 単位時間の道徳科の授業構想には、「授業構想シート(改)」(図2)を活用する。これは、当センターの令和3年度研究の研究成果物である「授業構想シート」に、各教科等や内容項目との関連を示す部分(図2の「ア」)を付け加えたシートである。このシートでは、「学びの軌跡シート(改)」を基に、本時の主題、内容項目を確認し、各教科等や内容項目との関連を把握する。そして、道徳的価値観、生徒観、教材観(図2の「イ」)を踏まえて本時のねらい(図2の「ウ」)を設定する。次に、本時のねらいから目指す生徒の学びの姿(図2の「エ」)を考える。その際、学習指導要領解説を基に作成した「評価の視点」(図2の「オ」・詳細は図3)から、目指す生徒の学びの姿を実現するための本時の学習指導過程や指導方法(図2の「カ」)を考える。また、「評価の視点」から、どの場面で、どの視点で評価を行うのか、どのように生徒にフィードバックをするのかを具体的に示す。

このように「授業構想シート(改)」を活用することで、各教科等や内容項目を相互に関連付けた授業の進め方や評価、フィードバックについて指導者間で共通理解を図る。

図2 「授業構想シート(改)」

図3 二つの「評価の視点」と七つの例

2 学習履歴「M-ログpluS」の活用と組織的な取組

(1) 学習履歴「M-ログpluS」の活用

「単元」に関わる学びを蓄積していくために、学習履歴「M-ログpluS」ⁱ⁾(以下「M-ログpluS」という。)を活用する(図4)。これは、当センターの令和4年度研究の研究成果物である学習履歴「M-ログ」に、「単元」のめあて(図4の「ア」)とめあてに対する学習前後の考えを記述する部分(図4の「イ」)を付け加えたシートである。「M-ログpluS」は1人1台端末に導入されている授業支援アプリや協働支援ツールに合わせてシートを調整し、生徒が道徳科や各教科等での学びを蓄積して活用する。活用方法として、生徒は「単元」の学習の始めに、めあてに対する学習前の考えを記述する。次に、道徳科の「評価の視点」である「多面的・多角的な見方へと発展させたか」と「自分自身との関わりで考えを深められたか」を横軸と縦軸で表し、道徳科や各教科等の学習を通して学んだことや考えたこと、気付いたことなど(以下、学びという。)を配置する(図4の「ウ」)。どこに学びを配置するか、「単元」のめあてと結び付けて、道徳科以外のどのような学

図4 生徒が学びを蓄積するシート「M-ログpluS」(内容は一例)

i) 「pluS」の「S」は「Subject(教科)」「Special activity(特別活動)」「School event(学校行事)」「総合的な学習の時間」など各教科等にあってはまる活動の頭文字を意味する。

びを配置するか、については、生徒が自由に考えて蓄積していく。そして、「単元」の学習の最後には「単元」の学びを振り返る授業を行う。「単元」の学びを振り返る授業では、生徒が「M-ログplus」に蓄積した学びを見返し、その内容を他者と交流した後に、「単元」のめあてに対する学習後の考えを記述する。そうすることで、生徒は他者との交流や学習前後の記述を比較することを通して、自分の考えの深まりや変容を感じることができる。

このように「M-ログplus」を活用して、「単元」の学びを振り返る授業を行うことで、生徒が道徳科と各教科等での学びを結び付けて、道徳性に係る成長を実感することにつながる。

(2) 指導と評価の一体的な充実を目指す組織的な取組

指導者は「授業構想シート(改)」や「M-ログplus」を活用して、授業の省察に組織的に取り組み、指導と評価の一体的な充実を目指す。

授業の省察では、指導者間で振り返りの記述や「M-ログplus」への学びの蓄積状況を分析する。そして、ねらいとする道徳的価値の理解を深めることができたか、学習指導過程や指導方法が適切であったかを見直す。このような省察を授業ごとに行うことで、学習指導過程の見直しや工夫につなげ、指導の充実を図る。さらに、振り返りの記述や「M-ログplus」への学びの蓄積状況は、「評価の視点」を基に分析することで、評価とフィードバックの充実にもつなげていく。その際、令和3年度研究で取り組んだ評価とフィードバックの研究成果を生かして、評価に用いる資料や授業中の言葉掛け、振り返りの記述に対しての線引きやコメントなどの評価とフィードバックの方法について指導者間で共通理解をして取り組んでいく。また、「M-ログplus」では生徒一人ひとりの学習状況を一覧することができるため、大きくくりなまとまりで生徒の道徳性に係る変容を見取ることにも活用する。

他にも、指導者がそれぞれ交代で学年の全学級を回って道徳科の授業を行う(以下、ローテーション道徳という。)ことで、学級担任ではない指導者とも授業の省察を行う機会を設け、組織的な取組の一層の充実を図る。

このような、指導と評価の一体的な充実を目指した組織的な取組を行うことで、生徒が道徳性に係る成長を実感する姿につなげていく。

3 研究成果の検証

「M-ログplus」への学びの蓄積状況や、「評価の視点」を踏まえた1単位時間の道徳科の授業における振り返りの記述、発言や授業中の様子、生徒と指導者への質問紙調査や聞き取り調査等を基に、研究成果を検証する。特に「M-ログplus」では、「単元」のめあてに対する記述の変容だけでなく、道徳科の学びと各教科等の学びを結び付けて蓄積、記述しているかどうかについても見取っていく。

V 研 究 の 進 め 方

1 研究の方法

- (1) 研究協力校の道徳科におけるこれまでの取組や生徒および指導者の意識調査から、各校の実態や課題を把握し、本研究の目標に沿って学校支援の内容を設定する。
- (2) 各校の道徳教育全体計画や年間指導計画、生徒の実態を把握したうえで、道徳科の授業において各教科等や内容項目を相互に関連付けた学習計画を立案する。
- (3) 1人1台端末に蓄積された道徳科や各教科等の学習履歴を基に、指導者とともに授業の省察を行い、指導の充実を図る。

- (4) 授業における生徒の学習状況と道徳性に係る成長の様子について、指導者とともに分析し、評価やフィードバックを行う。
- (5) 年2回の派遣研究協議会を実施し、各校での取組について協議し、共通理解を図る。
- (6) 研究協力校での取組内容、成果と課題についてまとめる。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究推進計画の立案	10～11月	生徒・指導者質問紙調査(終期)の実施と分析
4月～11月	派遣研究(中学校2校、原則各校週1回派遣)	11月	第2回派遣研究協議会
5月	派遣研究説明会	11月～12月	研究論文原稿執筆
6～7月	生徒・指導者質問紙調査(始期)の実施と分析	1月	研究発表準備
8月	第1回派遣研究協議会	2月	研究発表大会
夏季休業中	道徳科指導力アップ研修に参加	3月	研究のまとめ
	2学期に向けた授業構想の立案		

VI 研究の内容とその成果

1 研究協力校における現状の把握と道徳科における「単元」の設定

研究始期には、指導者への聞き取りや授業の参観を通して、研究協力校2校の現状を把握した。各校とも、道徳教育推進教師や各学年の道徳担当が中心となって、扱う教材やそのねらいについて、同学年の指導者間で共通理解を図っていた。しかし、各教科等や内容項目を関連付ける具体的な場面や内容、学年で重点的に取り扱う内容項目の把握については、指導者間で理解度に差があった。さらに、指導者11人を対象に質問紙調査を行ったところ、「道徳科の授業で各教科や総合的な学習の時間、特別活動(学校行事、生徒会活動等)との関連を意識した指導を行っている」という設問に対して、約半数の指導者が「どちらかと言えば当てはまらない」もしくは「当てはまらない」と回答した(図5の①)。また、「道徳教育で目指す生徒の姿について年間の見通しをもち、重点となる内容項目を把握して道徳科の授業を行っている」という設問に対しては、半数以上の指導者が「どちらかと言えば当てはまらない」もしくは「当てはまらない」と回答した(図5の②)。これらのことから、扱う教材やねらいについて、指導者間で共通理解を図っているものの、各教科等の関連付けや、重点的に扱う内容項目の把握については、十分に共通理解が図れていないことが分かった。他にも、生徒対象の質問紙調査を行ったところ「道徳の授業で、これまでの道徳の授業の記録を見返したり、比べたりして自分の考えを深めている」という設問に対して、約3分の1の生徒が「どちらかと言えば当てはまらない」もしくは「当てはまらない」と回答した(図6)。このことから、道徳科の授業で過去の学習内容と関連付けて授業を構想することや、生徒が自分の学習記録を見返す機会を充実する必要があることが分かった。

①道徳科の授業で各教科や総合的な学習の時間、特別活動(学校行事、生徒会活動等)との関連を意識した指導を行っている			
当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	どちらかと言えば当てはまらない	当てはまらない
2人	3人	5人	1人
②道徳教育で目指す生徒の姿について年間の見通しをもち、重点となる内容項目を把握して道徳科の授業を行っている			
当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	どちらかと言えば当てはまらない	当てはまらない
0人	4人	6人	1人
回答総数 11人			

図5 指導者対象質問紙調査の結果(始期)

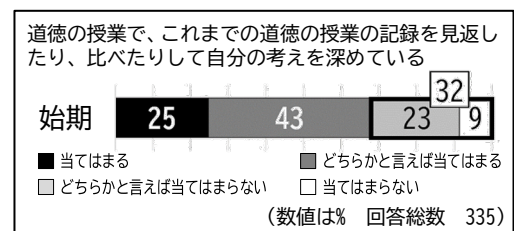


図6 生徒対象質問紙調査の結果(始期)

そこで、各校で作成している道徳教育全体計画や年間指導計画を基に「単元」を設定し、各教科等や内容項目を関連付ける場面や方法について共通理解を図り、実践を進めた。以下に、X校の実際と活用した「学びの軌跡シート(改)」を示す(p.6の図7)。

最初にX校の道徳教育全体計画から、学校と学年の重点目標に関わる内容項目を確認した(p.6の図7の①)。さらに年間指導計画から、それぞれの内容項目で扱う教材と関連付けることができる各教科

等について確認した(図7の「イ」)。次に、学年の道徳担当と協議し、道徳教育全体計画の学年の重点目標と関連性が強い内容項目を選び出し、「単元」を構成する内容項目を決定した(図7の「ウ」)。これらの「単元」設定に関する内容は「学びの軌跡シート(改)」に示し、指導者が内容を把握できるようにした。また、道徳教育全体計画の学年の重点目標から「単元」のめあてを設定し、「単元」を通して考えていく内容を明らかにした。設定した「単元」1の詳細を表1に示す。

内容項目		教材	各教科等との関連
A 主として自分自身に関すること			
(1) 自主、自律、自由と責任	責任をもつ 責任をもち、責任を分かち合う	私の高校生町内会デビュー	道徳指導、定期テスト計画
(2) 節度、節制	生活習慣に気づく	独りを憐む	保健体育科、家庭科
(3) 向上心、個性の伸長	個性を伸ばす	新しい夏のはじまり	体育祭、合唱コンクール、定期テスト、部活動
(4) 希望と勇氣、克己と強い意志	希望をもち、希望をかなへる	根メダルから得たもの	体育祭、合唱コンクール、定期テスト、部活動
(5) 真理の探究、創造	真理を探究して新しいものをつくる	IPS細胞で難病を治したい	理科、合唱コンクール
B 主として人との関わりに関すること			
(6) 思いやり、感謝	思いやりをもつ、感謝の心をもち、感謝の心を伝える	電車の中で	学校生活全般
(7) 礼儀	礼儀を身につける、礼儀を身につける	出迎え三步、見送り七歩	立腹の取組、全教科、あいさつ運動
(8) 友情、信頼	友情を築く、信頼を築く	逢うんだよ、健二	体育祭、合唱コンクール、修学旅行
(9) 相互理解、寛容	相互理解をもち、寛容をもち、寛容を伝える	言葉の向こうに	情報教育、各教科グループ活動
C 主として集団や社会との関わりに関すること			
(10) 遵法精神、公德心	法律を尊重し、公德心をもち、公德心を伝える	二通の手紙	社会科(公民)
(11) 公正、公平、社会正義	公正、公平をもち、社会正義をもち、社会正義を伝える	命の大切さ	IBRの取組(いじめ撲滅)、社会科(公民)
(12) 社会参画、公共の精神	社会参画をもち、公共の精神をもち、公共の精神を伝える	サトシの一票	社会科(公民)
(13) 勤労	勤労を尊重し、勤労を身につける	あるレジ打ちの女性	職場体験学習、社会科(公民)道徳指導
(14) 家族愛、家庭生活の充実	家族愛をもち、家庭生活を充実させる	一冊のノート	家庭科、長期休業の過ごし方
(15) よりよい学校生活、集団生活の充実	学校生活を充実させる	お別れ会	体育祭、合唱コンクール、生徒会活動
(16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度	郷土の伝統と文化を尊重し、郷土を愛する	「稲村の火」余話	修学旅行、地域学習
(17) 我が国の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度	我が国の伝統と文化を尊重し、郷土を愛する	父は能楽師	国語科、音楽科、社会科(歴史)
(18) 国際理解、国際貢献	国際理解をもち、国際貢献をもち、国際貢献を伝える	本とペンで世界を変えよう	社会科(公民)
D 主として生命や自然、高貴なものとの関わりに関すること			
(19) 生命の尊さ	生命の尊さを尊重し、生命の尊さを伝える	希望	修学旅行(平和学習)
(20) 自然愛護	自然の尊さを尊重し、自然の尊さを伝える	「川端」のある暮らし	地域清掃
(21) 感動、畏敬の念	感動をもち、畏敬の念をもち、感動を伝える	風景開眼	美術科
(22) よりよく生きる喜び	よりよく生きる喜びをもち、よりよく生きる喜びを伝える	風に立つライオン 世界を動かした美	英語科

図7 X校の第3学年の「学びの軌跡シート(改)」の一部

表1 X校の第3学年で設定した「単元」1の詳細

学年重点目標	最上級学年としての自覚をもって、学校や社会のルールを守り、責任ある行動で集団生活の向上に努める	
「単元」1のめあて	下級生があこがれる3年生になるために大切なことを考えよう	
「単元」1の構成	A 1 自主、自律、自由と責任	A 2 節度、節制
	B 7 礼儀	B 9 相互理解、寛容
	C 10 遵法精神、公德心	C 11 公正、公平、社会正義
	C 15 よりよい学校生活、集団生活の充実	

2 各教科等や内容項目を相互に関連付けた授業の実際

「学びの軌跡シート(改)」を活用して「単元」を設定することで、道徳科の授業でねらいとする道徳的価値の理解を深めるために各教科等と関連付けた指導の工夫を行うことと、「単元」のめあてや道徳科の学びと関連付けた声掛け、指導を各教科等で行うことにつなげた。また、「単元」の道徳科の授業に関連性をもたせるために、毎時間、授業の始まりに「単元」のめあてと「単元」で扱う教材名を提示し、前時の生徒の振り返りの記述を数人分紹介した。このことにより、生徒がこれまでの学習内容を振り返り、本時の学習と結び付けて考えようとする、こと、「単元」のめあてについて見つめ直すこと、多様な考え方があることに気付くことにつなげた。他にも、学習指導過程において、前時の学習内容を想起させるような言葉掛けや、前時の学習内容を生かした発問を設定するなどの工夫を行った。以下に、各教科等や内容項目を関連付けた授業の実際を述べる。

(1) 教科(社会科)と関連付けた授業の実際

X校の第3学年で実施した内容項目「C12社会参画、公共の精神」(「サトシの一票」日本文教出版)の授業を例に、社会科(公民的分野)と関連付けた授業の実際を以下に述べる(図7の「工」)。

この授業では「社会の一員として、主体的に社会に参画することで、よりよい社会の実現に寄与しようとする実践意欲と態度を養うこと」をねらいとした。そこで、社会科の授業で学習した選挙の仕組みについての学習内容を踏まえて授業を構想した。具体的には、授業の導入で、社会科での選挙についての学習と関連付けて自分の考えを見つめ直すことができるよう、投票率のグラフを提示したり、「選挙権を得たら自分は選挙に行くか、行かないか」について1人1台端末を活用して学

級で意見交流をしたりした。その後、中心発問で「登場人物が『将来の一票』をどう考えているか」について問い、本時のねらいに迫った。授業の終わりには、導入時と授業後の自分の考えを比較しながら、本時の授業での学びについて振り返った。この授業について、生徒の振り返りには、進んで選挙に参加しようとする意欲を示す記述が多くあり、本時のねらいとする道徳的価値について考えを深めている姿が見られた(図8)。

- ・今回の学習で選挙は大切なものと思った。「関係ない、ではない」という友達の意見に確かにそうだと思うた。そのために、今も生徒会選挙や学級会をしているんだと感じた。
- ・自分の住んでいるところをよりよくしたいという思いがあるから、「自分が任せたい」と思った人に投票したいと思った。
- ・この授業で、選挙は決して自分に関係ないことではないし、もっと暮らしやすい町にするために、たった一票だけど、大切に投票したいと思った。

図8 生徒の振り返りの記述(下線は筆者)

授業を担当した指導者Aが、社会科を担当する指導者Bに、この授業での生徒の振り返りの記述の内容や授業の様子を伝えたところ、指導者Bは「今回の道徳科の学びと社会科の学習を関連付けることで、社会の一員として社会参画する意欲を高める指導につなげることができる」と考えた。そこで、指導者Bは、地方自治についての学習で、生徒が実際に住んでいる自治体を取り上げて、自分事として感じられるように学習課題を設定し、授業を進めていった。指導者Bは、意欲的に学習に取り組む生徒の姿から「道徳科での学びを結び付け、住民の一人として社会参画する意欲を高める指導の工夫ができたのではないか」と感じた。

このように、道徳科の授業を社会科での学びと関連付けて構想することで、生徒が道徳的価値について考えを深めることができた。さらに、社会科の授業においても、道徳科での学びを踏まえて指導の工夫を行うことで、生徒が学びを他教科と結び付けて学習に取り組むことにつながった。

(2) 学校行事と関連付けた授業の実際

Y校の第1学年で文化祭や体育大会を終えた11月に実施した内容項目「C15よりよい学校生活、集団生活の充実」(「けやき中を誇りに」教育出版)の授業を例に、学校行事と関連付けた授業の実際を以下に述べる。

この授業では「充実した学校生活を送るために、集団の一員としての自覚をもって行動しようとする心情を養うこと」をねらいとして授業を構想した。その際、中学校入学後の先輩との関わりやその中で感じた先輩へのあこがれなど、生徒の実体験を想起して学習を進めていくこととした。

実際の授業では、導入時に「みんなはどんな先輩になっていきたいですか」「学校行事などを通して、先輩からどんなことを学びましたか」と問いかけ、生徒一人ひとりが自分の体験から理想とする先輩像について考えを巡らせた。また、教材を範読する際に、指導者は、自分たちの合唱コンクールの取組を思い出すよう声掛けをして、教材の内容を自分事として考えやすくするよう工夫をした。

このように生徒が実体験と重ね合わせて考えを深めることができるように、発問や声掛けの工夫をしたことで、「授業や行事などいろいろな体験ができる学校で、一つひとつを仲間と協力し合い、充実した学校生活を送れるようになりたいです。この話でいうと、『賞を目的に頑張ろう』ではなく、クラスで練習し合った日々を大切に思えるようにしたいです」など、自分自身との関わりの中で考えを深め、これからの行動につなげようとしている記述が見られた(図9)。

- ・この話は私たちのクラスにも当てはまるどころがありました。合唱コンクールで努力したことを更に生かしたいと思いました。先輩たちが受け継いだY校の文化を後輩にも伝えるために誇りをもって生活していくことが大切だと思いました。
- ・この話は自分たちのクラスと重なることが多い話だったので、今までの自分の行動を振り返って、これからどう生活していきたいかを考えることができた。この話の中の、3年生との交流の場面のよう、自分も他学年や他クラスの人との交流を大切に、よりよい中学校生活にしていきたい。

図9 生徒の振り返りの記述(下線は筆者)

このことから学校行事と道徳科の学びを関連付ける発問や声掛けを行うことで、教材の内容をより身近に感じ、自分自身との関わりの中で考えを深めている生徒の姿を見取ることができた。

(3) 内容項目を関連付けた授業の実際

X校の第3学年で実施した授業のうち、内容項目「A3 向上心、個性の伸長」(「新しい夏のはじまり」日本文教出版)の授業を例に、内容項目を関連付けた授業の実際を以下に述べる(p.6の図7の[オ])。この授業に関わる「単元」と授業の概要(表2)、授業構想の一部(図10)をそれぞれ示す。

表2 「単元」と内容項目を関連付けた授業の概要

「単元」の構成	A 1 自主、自律、自由と責任	A 3 向上心、個性の伸長	A 4 希望と勇気、克己と強い意志	A 5 真理の探究、創造
本時 ア				
内容項目・教材	A 3 向上心、個性の伸長 「新しい夏のはじまり」(日本文教出版)			
教材の概要	夏の大会で敗退し、部活動を引退した中学3年生が、部活動で成果を出せなかったことについて、これまで自分がしてきた努力に価値があったかどうか不安になり、その思いを友人に語る。			
前時				
内容項目・教材	A 4 希望と勇気、克己と強い意志 「銀メダルから得たもの」(日本文教出版)			
教材の概要	吉田沙保里選手が、オリンピック4連覇をかけて挑んだ試合で敗退する。しかし、試合後の会見では「銀メダルから得たものがある」とコメントする。			

本時の授業(表2の[ア])では「目標に向かって努力することで、自己の成長があることに気づき、そのために努力しようとする実践意欲と態度を養うこと」をねらいとした。そこで、指導者は「結果だけに一喜一憂するのではなく、目標の達成に向けて努力を続けることの大切さ」について考えるために、前時の学習と関連付けて、「前時に学習した吉田沙保里選手なら、二人にどんな声をかけると思いますか」という中心発問を設定した。

展開	範読 → 教材の内容を確認 ・垂樹も佐々木も県大会には行けず、引退 ・お互い、結果に納得していない、満足していない	
	発問1「佐々木のつぶやきに垂樹はどうして怒ったような声で答えたのだろう」 ・自分も不安なことだったから ・考えたくないつぶやきだったから ・結果を受け止められなくて、これからのことなんて考えられない	評価の視点④ 発言 ※挙手で発表
	発問2「どんな思いで垂樹は体育館のとびらを勢いよくしめたのだろう」 ・不安だけど、やってきたことを無駄にしたくない ・無駄にしないぞ、という意気込み ・がんばってきた自分を否定したくない	評価の視点⑦ 発言・記述 ※机間支援、声掛けを行う ※意図的指名を行う
	中心発問「前時に学習した吉田選手なら、二人にどんな声をかけると思いますか」 ・努力することがプラスになるよ ・結果だけにとらわれたらだめだよ ⇒色んな意見を交流し、結果のよし悪しだけでなく、自分を成長させようと努力することの大切さに気付くことができるようにする。	評価の視点① 発言・記述 ※意図的指名を行う

図10 「授業構想シート(改)」の一部

この発問を行ったことで、生徒は教材に登場する中学3年生の心情理解を基に、「実際に挫折を乗り越えて努力を続けた吉田沙保里選手ならば、悩む中学生にどんな声掛けをするだろう」と多面的・多角的な視点で考えを巡らせていた。生徒が考えた声掛けの記述を見ると「頑張ってきたことは無駄じゃないから自分の頑張りを認めて次に生かそう」「勝った試合も負けた試合もその時の気持ちもこれからの人生に生かせばいい」といった記述があり、本時のねらいに迫ることができた発問であったことが分かる。また、1人1台端末を活用して、生徒が考えた声掛けの記述を学級内で交流したことで、生徒は自分にはない多様な意見にふれることができた。

生徒の振り返りの記述を見ると「最後の大会までにやれる練習は全力で取り組んで、後悔しないようにしたい」「頑張ったことが結果に必ずつながるわけではないし、結果を見ていつも落ち込んでいたけど、これからは前向きな考え方にもっていけるように意識することが大切だ」という思いに変わった」という記述が見られた。このことから既習の内容項目と関連付けて授業を構想することで、生徒がこれまでの学びと結び付けて自分の生き方を見つめ直し、これからの生き方につなげようとする生徒の姿を見取ることができた。

3 組織的な取組による指導と評価の一体的な充実

(1) 授業後の省察の取組

X校では、生徒の振り返りの記述への線引きやコメントによる評価、フィードバックの方法を、

校内研究部会の一つである道徳改善部会から発信し、指導者間で共通理解を図ってきた。その取組を生かして、「授業構想シート(改)」で想定した目指す生徒の学びの姿を基に、生徒の振り返りの記述から授業後に省察を行った。

省察では、想定した生徒の発言や記述が見られなかったときや本時のねらいに十分に迫ることができなかったときには、発問の設定や意図的指名、生徒の発言に対する問い返しの発問の設定などが適切であったかなどを見直し、指導の充実につなげた(図11)。さらに、振り返りの記

指導者C：「自分のいのちを百点満点に生きる」の部分について発問することでは、本時のねらいである「自分のよいところを伸ばそうとする意欲や態度」には迫れないと感じた。それよりも、「作者がどんな思いをこの詩にこめたか」について問う方が生徒は、考えを深められたと思う。

指導者D：「百点満点」で生きることの大切さを感じてほしかったが、生徒は予想した反応ではなかった。この教材を読んだときに生徒がどう反応するか、予想が十分ではなかった。

指導者E：生徒が自分事として考えるために、1人1台端末を使って研修で紹介されたアンケート調査を導入で取り入れようと思う。

指導者F：この発問の時には、考えを整理し、広げていくために、意見の種類ごとに意図的指名をすることが効果的だと思う。

図11 省察でのやりとり(一部)

述を画像データ化して学年内で共有し、学級担任だけでなく、学級担任以外の指導者も一緒になって「評価の視点」から分析することで、評価やフィードバックの充実を図った(図12)。具体的には、振り返りの記述に線引きやコメントを行うことと、授業の最初に前時の振り返りとして、「単元」のめあてと結び付けている記述、多面的・多角的な見方で考えている記述、自分自身との関わりで考えている記述を紹介することを行った。



図12 複数で協議する様子

このような省察を組織的に行ったことで、指導や評価、フィードバックの充実を図る指導者の姿が見られ、指導と評価の一体的な充実につながった。

(2) ローテーション道徳の実施

Y校では、学級担任と学級担任以外の指導者9人が、「単元」1と「単元」2の担当に分かれ、それぞれの指導者が「単元」を構成する内容項目の一つの授業を担当し、全4学級で順に授業を行うローテーション道徳を実施した(表3)。その際、授業を担当する指導者が毎回変わり、普段授業を担当していない学級で指導することがあるため、生徒の実態や前時の学習状況を把握することに課題があることが分かった。そこでY校では、前もって学年会で個々の生徒についての情報共有をした。さらに、授業後の省察で、授業中の発言や様子、振り返りの記述から、指導者間で丁寧に省察を行い、学習状況を把握した。その中では、「次はどの先生が来るんだろう」「担任の先生じゃないのは新鮮で、いつもとは違う学びがある」など、生徒が前向きに道徳科の授業に取り組もうとしている言葉を伝え合う様子があった。また、道徳科の授業における生徒の反応や発言だけでなく、担当している授業の様子との違い、学級担任が感じている雰囲気との違いなど、様々な視点で生徒の様子を指導者間で話し合う姿も見られた。

このような生徒の情報共有や授業の省察を行うことは、普段授業を担当していない学級で授業を行う指導者にとっては、授業前に学級の雰囲気や生徒の様子を理解することにつながり、発問に対する生徒の反応を予想する手掛かりとなった。また、学級担任にとって、他の指導者の授業を参観することで、担任する学級の生徒の新たな一面を知るきっかけになった。加えて、生徒の様子を丁

表3 Y校の第1学年で設定した「単元」とローテーション道徳で指導者が担当する内容項目

「単元」1：夢や目標を実現するために大切なことを考えよう		
時期	指導者	「単元」を構成する内容項目
8月末から10月下旬	①	A1 自主、自立、自由と責任
	②	A3 向上心、個性の伸長
	③	A4 希望と勇気、克己と強い意志
	④	A5 真理の探究、創造
	⑤	D22よりよく生きる喜び
「単元」2：お互いを高め合いながら生活するために大切なことを考えよう		
11月初旬から12月中旬	⑥	B7 礼儀
	⑦	C11 公正、公平、社会正義
	⑧	C12 社会参画、公共の精神
	⑨	C15 よりよい学校生活、集団生活の充実

寧に観察し、評価の充実に生かすことができた。他にも、ローテーション道徳で、指導者が同じ教材で複数回授業を行うことや他の指導者の授業を参観することで、「中心発問での話し合いにもっと時間を確保したい」「視点を変えて考える発問を設定して学習を進めよう」「自分も1人1台端末を活用した指導を考えよう」など、指導の充実につなげることもできた。

このように生徒の情報共有や学習状況を把握して、ローテーション道徳を実施したことで、学年組織として生徒理解を深めることにつながるだけでなく、道徳科における指導と評価の一体的な充実にもつながった。

4 学習履歴「M-ログpluS」を活用した実践

(1) 学習履歴「M-ログpluS」への学びの蓄積

「M-ログpluS」の活用にあたって、「単元」についての説明や、「M-ログpluS」に学びを蓄積する視点や方法の説明を生徒に行った。Y校では、これまでから1人1台端末で、毎時間の振り返りシートを記述、蓄積していた。そこで、生徒が振り返りシートのスクリーンショットを貼り付ける形で「M-ログpluS」を活用した。X校では、授業支援ソフト・オクリンクの特性に合わせて、「M-ログpluS」を「単元」のめあてに対する考えを記述するシート(図13の「ア」)と道徳科や各教科等の学びを蓄積するシート(図13の「イ」)の2枚に分けて活用した。また、X校では、生徒が「単元」のめあてと結び付けた各教科等での学びを定期的に蓄積するために、道徳科の授業時間だけでなく、週に1回、帰りの会の時間を活用した。帰

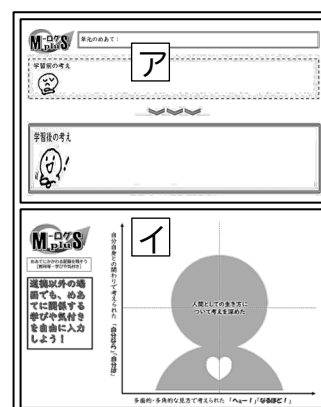


図13 X校の「M-ログpluS」

りの会で学びを蓄積する時間をとることで、生徒は「単元」のめあてと結び付く各教科等での学びがないか考えるようになった。「M-ログpluS」の活用を始めたころは、操作に時間がかかり、じっくりと1週間の学びを振り返る余裕がないように感じられたが、慣れてくると「どうしてそれを書いたの」「確かにそれもあったな」と他者と交流しながら学びを蓄積する様子が見られた。

(2) 成長の実感につなげる「単元」を振り返る授業

「単元」の終わりには、生徒が学びを蓄積した「M-ログpluS」を活用して、「単元」の学びを振り返る授業を行った。授業では、最初に、これまで「M-ログpluS」に蓄積してきた道徳科の学びや、各教科等の学びを見返したり追加したりして学びを整理した。次に、「M-ログpluS」に蓄積した内容や蓄積した理由を生徒同士で説明し合い、考えを交流する時間を設定した。X校では、交流する時間に生徒aが「ALTの先生と話すときに英語はうまく話せないけど、道徳の授業で学んだ、気持ちを態度で表すことはできると思った」と発言したことから、道徳科の学びを英語科の授業と結び付けて考えを深めたことが分かる(図14)。また、交流後には、「単元」のめあてである「下級生があこがれる3年生になるために大切なことを考えよう」について、学習後の考えを記述し、その内容や理由についても、生徒同士で交流した。その中で生徒bが「前は下級生に優しく接することが大事だと思っていたけど、注意しないといけない場面では、厳しく言うことも大事だと思った」と発言したり、生徒cが「単元」を通して学習した道徳科の内容を踏まえ

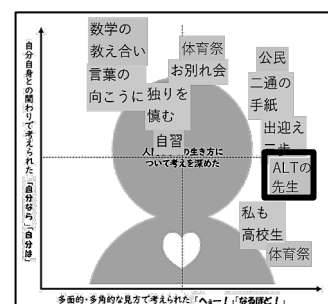


図14 生徒a(X校)の「M-ログpluS」のシートの一部(囲みは筆者)

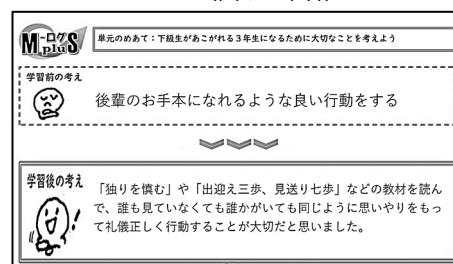


図15 生徒c(X校)の「M-ログpluS」のシートの一部

て、「単元」のめあてについての考えを深めたことを記述したりした(p.10の図15)。Y校においても「単元」のめあてである「夢や目標を実現するために大切なことを考えよう」について、生徒dが「M-ログpluS」に整理したように、道徳科と各教科等の学びを結び付けて考えが変化した記述があった(図16)。このように、「単元」で学習してきたことを振り返ることで、考えが変わったことや深まったことについての発言や記述が見られた。

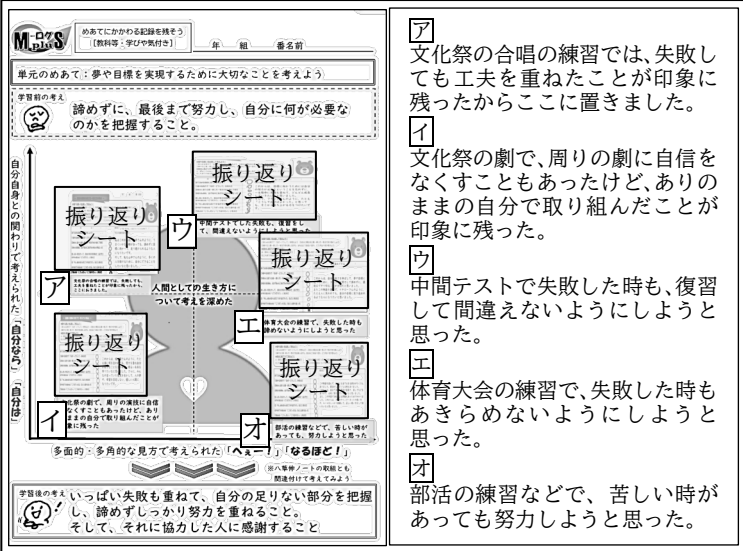


図16 生徒d(Y校)の「M-ログpluS」(振り返りシートや蓄積された学びア～オ)とその詳細は筆者)

「単元」の学びを振り返る授業について、生徒の振り返りには「自分の経験や日常生活から、さらに考えを深めることができた」「自分の考えの変化がわかりやすく、成長したことを感じる」などの記述が見られた(図17)。このことから、「単元」の学びを振り返ることで、道徳科の学びと各教科等の学びを結び付けて、道徳性に係る成長の実感を深めている姿を見取ることができた。

さらに、生徒の「M-ログpluS」を分析したところ、多くの生徒が道徳科での学びと学校行事での学びを結び付けて蓄積していることが分かった。このことから、指導者は、学校行事を実施する際には、その活動で養いたい道徳性を明確にして計画を立てることで、道徳教育の視点を意識した指導を行うことができると実感するようになった。

- ・「単元」を学ぶ前の考えと学んでからの考えを書くため、どのように考えが変わったのかわかりやすく、自分の成長したところが分かる。
- ・「単元」があるとそれぞれの授業の内容同士を結び付けて考えることができ、より学びを深めやすい。
- ・「M-ログpluS」での交流でみんなが考えていることが分かり、それをこれからの自分につなげることができたため成長を感じる。
- ・「M-ログpluS」のグラフがどんどん埋まっていくことで、自分が考えたことが整理しやすく、成長を感じる。
- ・振り返りを書いてから「M-ログpluS」に貼り付けることでやっぱり自分はこう思ったなどが友達とも交流しやすいし、2回振り返りをしている気がしてもっと勉強できた気持ちになって成長を感じる。
- ・「M-ログpluS」は普段の生活、学校生活が道徳の学習につながっていて、自分がどう成長しているかが分かる。

図17 「M-ログpluS」を活用した「単元」の学びを振り返る授業での生徒の記述(下線は筆者)

(3) 学習履歴「M-ログpluS」を活用した授業改善

X校の第3学年のローテーション道徳で実施した授業(「二通の手紙」日本文教出版)では、生徒一人ひとりが「M-ログpluS」のどの位置に学びを蓄積しているかを、学級単位で分析することで授業改善につなげた。「二通の手紙」の概要を表4に示す。

表4 「二通の手紙」の概要

内容項目	C10遵法精神、公德心	主題	法やきまりの意義
ねらい	法やきまりの意義を理解し、それらを主体的に守ろうとする態度や実践意欲を養う		
教材の概要			
動物園で入園係をしていた元さんのところに、入園終了時刻が過ぎてから小学校3年生くらいの女の子とその弟である三、四歳くらいの男の子がやってくる。女の子が、弟の誕生日にどうしても入園したいと元さんに伝えたところ、元さんは、入園時刻を過ぎていることや、保護者と同伴でないと入園できない規則であることを知りながらも、事情を察して二人を入園させる。ところが、閉園時刻を過ぎても姉弟は戻ってこず、職員総出で捜索することになった。二人は無事であったが、入園を許可した元さんの行動が園内で問題視される。数日後そのことについて、姉弟の母親から謝罪と感謝の手紙が届く一方、元さんは、上司から懲戒処分の文書を受け取る。すると元さんは、「この年になって初めて考えさせられることばかりです。この二通の手紙のおかげです。また、新たな出発ができそうです。本当にお世話になりました」と語り、自ら退職する。			

授業では「規則を守ること」と「幼い姉弟の思いに応えること」について葛藤する場面を取り上げ、生徒が考えを交流することで、道徳的価値の理解を深める授業展開を設定した。その際、生徒が活発に考えを交流するために、1人1台端末を活用し、幼い姉弟を入園させた元さんの行動についての共感度を「心情メーター」を使い、0%~100%の数値で表すこととした。

実際の授業では、最初は元さんの行動に高い共感度を示し、「規則を破っても仕方ない」という発言をした生徒も多くいた。しかし、グループや学級での考えの交流を通して、「ルールを守ることが自分や他の人たちの安心や安全につながるから、しっかりとルールを守ろうと思う」といった記述へと変化し、生徒は道徳的価値について考えを深めていった。

この授業において、先に授業を行った3、4組の「M-ログpluS」への学びの配置や記述の内容を分析したところ、「自分自身との関わり」で学びを深めたと感じている生徒が多かった。そこで、後に授業を行う1、2組では、指導者は、グループ交流の中で生徒が発言した「規則を守ることと、姉弟の思いに応えることのどちらも大事にするにはどうしたらいいかな」という言葉から、「多面的・多角的な見方」からも考えを深められるように発問を追加することとした。具体的には、本時でねらいとする道徳的価値に迫った後に、「元さんがどのような行動をとっていたら、お互いに幸せになれたらう」という発問を追加した(図18の「ア」)。その結果、「その人の安全を考えたら、入園させたことは本当に正しいかどうか分からなくなるから、他の解決策を探すべきなのかな、と思いました」「自分や他の人の安全のためにルールを守らなければならないと思う。ルールを守って、お互いにいい気持ちになる方法もあるんじゃないかと思った」という生徒の振り返りの記述が見られた。このことから、元さんの行動について「規則を守るか、規則を破り幼い姉弟の思いに応えるか」の二択の考えから、「規則を守ることの大切さを理解した上で、より相手に思いを巡らせた行動があるのではないか」と考えを広げることができた。

展
開

発問1「幼い姉弟を入園させた元さんの行動にあなたはどのくらい共感できますか」※1人1台端末で、考えを全体で共有し、個々の考えを聞く。

- ・幼い姉弟の気持ちを考えると入れてあげたい
- ・ルールは守らないといけないけど、入れてあげる気持ちの方が強い
- ・悩むけど入れてあげる
- ・悩むけど入れない
- ・規則だから入れてあげない

⇒元さんの晴れ晴れとした表情から、規則の役割やそれを守ろうとするこの大切さの理解につなげる。

追加発問「元さんがどのような行動をとっていたら、お互いに幸せになれたらう」**ア**

- ・幼い姉弟と一緒に園内を行動してあげる
- ・次の機会に入れるよう約束をしてあげる

⇒規則を守ることが大切にながら、幼い姉弟の気持ちに応えるよりよい方法があるのではないか、ということを考える時間にする。

図18 「授業構想シート(改)」の一部

さらに、この授業について、発問を追加する前の3、4組と追加した後の1、2組の「M-ログpluS」を分析したところ、1、2組では「多面的・多角的な見方で考えられた」と強く感じている位置(図19の「イ」)に学びを配置する生徒が増加していた(図20)。このことから、「M-ログpluS」への学びの蓄積状況を、学級単位で分析することで、授業改善に役立てることができた。

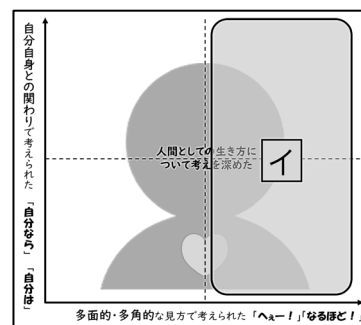


図19 「M-ログpluS」の分析位置

	3、4組	1、2組
イ	50%	73%
(分析対象 116人)		

図20 「M-ログpluS」の分析結果

さらに、この授業について、発問を追加する前の3、4組と追加した後の1、2組の「M-ログpluS」を分析したところ、1、2組では「多面的・多角的な見方で考えられた」と強く感じている位置(図19の「イ」)に学びを配置する生徒が増加していた(図20)。このことから、「M-ログpluS」への学びの蓄積状況を、学級単位で分析することで、授業改善に役立てることができた。

5 生徒と指導者の変容

(1) 生徒の変容

生徒対象の質問紙調査を研究始期である6、7月と研究終期である11月に実施した。「道徳の授業で学習したことと、各教科や総合的な学習、学校行事などでの学びや経験がつながっていると感じることがある」の設問を比較すると、肯定的な回答を示した生徒の割合が増加した(p. 13の図21)。また、肯定的な回答を示した生徒に理由を尋ねると、「授業中に発言するときに、発言の仕方やどうやったら相手に伝わりやすくなるかを道徳の授業で学んだことを使って考えることができるから」「文化祭や体育祭の学校行事を通して人の気持ちを考えて行動できるようになったから」などが

あった(図22)。このことから、各教科や学校生活と結び付けて、自分自身を振り返り、よりよい生き方を目指そうとする様子や、道徳性に係る成長の実感が深まっていることが分かる。

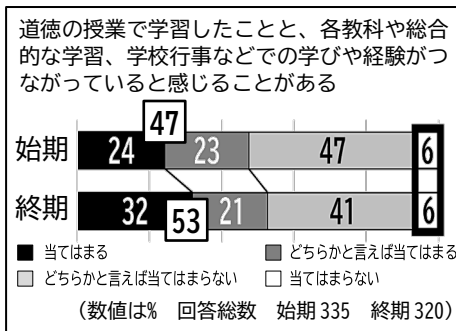


図21 生徒対象質問紙調査の結果(囲みは筆者)

- ・道徳の授業で人と人の関係などを学び、発表の際に周りの人の意見をよく聞き、さらに自分のアイデアなどを共有しながらよりよいアイデアを出すことができたから。
- ・友達の意見を聞いて新たな考えが生まれたり、班活動では自分の意見を相手に伝えて質問し合ったりできたと思うから。
- ・受験勉強をどう頑張ればいいのか分からなかったけど、努力することの大切さを学んで頑張ろうと思えたから。
- ・道徳の授業で命の大切さについて学んだことと、自然体験学習でのアマゴつかみの命の学習が繋がっていると感じたから。

図22 生徒対象質問紙調査の自由記述(一部)(下線は筆者)

一方で、「当てはまらない」と回答をした生徒の割合は研究始期から終期にかけてほとんど変化がない。その理由を聞くと、「道徳で学習したことが他の授業にあまりつながっていると感じないから」と答えた生徒がいた。また、つながりを感じていない生徒の多くは、「道徳の授業を通して、自分の成長を感じることがある」の設問に、「当てはまらない」と答えていた。このことから、「単元」を設定する時期や内容の見直し、効果的に道徳科と各教科等を関連付ける工夫、「M-ログplus」をより効果的に活用する方法などの改善を図り、生徒が道徳科と各教科等を結び付けて成長を実感できる授業構想を行うことが必要である。加えて、1単位時間の道徳科の授業を充実させることと生徒の成長の実感につながる評価やフィードバックを行うことを一層進めていく必要がある。

(2) 指導者の道徳科の授業についての意識の変容

指導者を対象とした質問紙調査から、研究の終期には、道徳科の授業における、各教科等を関連付けた指導について、意識の変容が見られた(図23)。このことについて、聞き取り調査を行ったところ、生徒が道徳的価値の理解を深め、道徳性に係る成長を実感するために、道徳科における「単元」を設定することや「M-ログplus」を活用することに効果を感じている意見があった(図24)。このことから、研究を通して、道徳科と各教科等を関連付けようとする意識の向上につながったと考えられる。

道徳科の授業で各教科や総合的な学習の時間、特別活動(学校行事、生徒会活動等)との関連を意識した指導を行っている				
	当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	どちらかと言えば当てはまらない	当てはまらない
始期	2人	3人	5人	1人
終期	2人	8人	1人	0人
回答総数 11人				

図23 指導者対象質問紙調査の結果

- ・道徳の内容項目を日頃から意識することで、道徳の授業時間だけでなく、自分が担当する教科や、行事などにも関連付けていくことができると感じた。
- ・「単元」で道徳の学習をすることで、日常生活と関連付ける場面が多くなった。
- ・「単元」を設定して、毎時間前回の振り返りの記述を紹介することで、生徒がこれまでよりも、道徳の授業で学習してきたことを意識するようになった。
- ・「単元」のめあてを「M-ログplus」を使って考えていくことで、自分の考えの変化がわかりやすく、生徒は自分の成長を感じていた。
- ・「単元」の設定は、今回研究で設定したもの以外でも活用できそうだと感じた。うまく学校生活を関連付けることで、生徒の考えを深める効果があると感じた。

図24 指導者の所感(下線は筆者)

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 道徳教育全体計画や年間指導計画を基に、「学びの軌跡シート(改)」を活用して、「単元」を設定することで、各教科等や内容項目を相互に関連付けた授業を構想し、ねらいとする道徳的価値に迫る授業を実践することができた。

- (2) 生徒が自らの学びを蓄積した「M-ログplus」を整理し、見直すことで、道徳科の学びと各教科等の学びを結び付けて振り返りを行い、自らの学びの深まりや変容から道徳性に係る成長を実感することができた。
- (3) 「M-ログplus」を活用し、組織的に省察を行うことで、道徳科の指導と評価の一体的な充実につながった。

2 今後の課題

- (1) 道徳教育の要としての役割から、道徳科を各教育活動とより効果的に関連付けるために、学校や生徒の実態に即して教科横断的な学習計画を立案する必要がある。
- (2) 「M-ログplus」に蓄積された内容を学級や学年などの集団として分析し、その結果を道徳科の授業改善や様々な教育活動での指導に生かす方法をさらに検討する必要がある。

文

献

- 1)文部科学省「学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」、平成30年(2018年)
- 2)文部科学省中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」、令和3年(2021年)
- 滋賀県総合教育センター「道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深め、自らの成長を実感できる中学校道徳科の授業づくり」、令和4年(2022年)
- 滋賀県総合教育センター「生徒自らが学びを振り返りながら学習し、成長を実感できる中学校道徳科の授業改善」、令和5年(2023年)
- 田沼茂紀『中学校道徳科授業スタンダード「資質・能力」を育む授業と評価「実践の手引き」』、東洋館出版社、平成31年(2019年)
- 諸富祥彦『考え、議論する道徳科授業の新しいアプローチ』、明治図書出版、平成29年(2017年)

トータルアドバイザー

国立大学法人滋賀大学教育学部教授

太田 拓紀

研究協力校

大津市立青山中学校

竜王町立竜王中学校

研究協力員

大津市立青山中学校

林 純子

上田 剛士

吉村 知恵

山村 剛央

平井 晃子

馬場 峰子

松田 綾子

藤関麻里子

辻井 良太

小西 辰也

竜王町立竜王中学校

森 健太

松並 紘樹

甲本 将希

成田 彩

平木 亮祐

谷澤 仁美

小林 誠

藤原 穂香

大西 慧輔

高橋 明善

譽田 誠

倉田 智輝